

汽車中に於ける幼児

堀 七 藏

一

この夏季休業中に朝鮮から樺太に旅行する機会を得たので比較的長途の汽車旅行をするやうになつた。その汽車中で無聊なるが儘に乘客についていろ／＼の觀察を試みることにした。その一端を茲に披露して我が國幼児教育者の參考の資に供することを得ば幸である。

私は七月中に信越線によつて富山縣に行き、更に八月上旬水戸に旅行して常磐線を往復した後、東海道線から山陽線と一路、直に連絡船に乗つて朝鮮京城に行き、更に仁川まで往復したのである。そして京城より引返して更に山陽線を東上し

米原より北陸線・羽越線によりて青森に出た。青函連絡船で直に北海道に渡つたのが八月中旬。札幌で開催中の拓植博覽會を駆歩で見物し、旭川に出て北海道稚内から樺太の大泊についたのである。樺太では大泊から豊原、豊原から眞岡に行き講習をすまして、また大泊に引返し、一路汽船と汽車で三晝夜の旅行をなして歸京したのである。

その間の觀察であるため比較的單調であるのは誠に遺憾である。

二

どの汽車でも幼児の乘客が割合に多い。殊に東海道・山陽線には多い。二等で幼児をつれた婦人

乗客が多いのはさすが東海道線だといふことが首肯出来る。

更に關釜連絡船の二等には幼児や子供が多く、青函連絡船も中々多い。只稚内大泊の連絡船には全く幼児がゐないといふ有様である。汽車の三等客でも汽船では二等に乗換る人々が多いから（二等）車中の幼児よりも汽船（二等）には遙に幼児が多いのは當然の現象であらう。兎に角幼児を連れた乗客の多いことは外國の汽車や汽船中で見當らない我が國特有の現象といふ感をふかく抱く。

歐洲の汽車で一等二等は國際列車で國境を越えて行くものであるから無論幼児が乗つてゐる筈がない。また三等の國內列車でも幼児を連れた乗客は誠に稀である。英國では凡て三等に乗つたのであるが一度も幼児を連れたものが見當らなかつた獨逸でも三等に乗つたことが多いが幼児をつれた婦人は數回あつたし、伊太利でも二三回あつたの

である。しかし國境を越してといふ場合には全くないといつてよい。出稼人の多い伊太利人にはたま／＼見かけるがそれも多くは五六歳位の幼児で乳呑子を連れた婦人は全く見かけないのである。アメリカの汽車は等級別がないが、シカゴ地方で二三人の子供が乗つてゐたことがあるだけで、その他には一回にも子供が乗つてゐないのである。英國などでは市内のバスでも子供は乗つてゐても幼児を連れた婦人は全く乗つてゐないのである。これは歐洲では子供や幼児はそれ／＼その年齢にふさはしい生活をさせるべきものである。子供が大人の眞似をしたり、大人の生活をなすことは甚だよくない。これは子供の身體精神の發達上適當といふのが原則となつてゐるからである。子供は子供公園で遊べばよい。電車や自働車に乗つて遠出をなす必要もなく、そんなことは子供の生活に無理がかゝり發育上不良な結果を來すものであ

る。殊に汽車や汽船などは大人の交通機關であるから、子供が乗るなどは以ての外といふ有様である。大人が汽車に乗るために子供を連れるなどは子供を犠牲にするもので、甚だよろしくないといふ方針である。これは歐米の生活様式の然らしめる所であるが、子供には子供に適當なる生活をさせて子供を大人の犠牲にしてはならぬといふ教育上の方針に基く結果である。また一には歐米では我が國の如く子供を可愛がらぬためでもある。

我が國では子供に無理があつても可愛いから手放して置くことが出来ない。母親が旅行をするときには乳呑兒は勿論、子供を連れて行くことが子供に悪い結果を及ぼす及ぼさぬは全く考慮の外である。子供がどんなに汽車旅行に退屈するともまた子供の生活に無理がかゝるともそんなことは殆ど論外である。家庭生活の關係もあるが子供を大人の犠牲に供しても平氣である。それが子供に喜ば

れるものとなす場合が多い。幸に我が國は子供の國である。乗客も子供の爲には座席を多くふさいでゐても我慢はするし車掌も亦子供を特別取扱となして多くの座席をふさいでも何ともいはないから結構である。これが権利義務をやかましくいふやうになれば賃金を半額しか拂はぬ子供が大人の二人分の座席を塞いだり、無賃の乳呑兒が二人前の座席をふさぐことは大きな問題となるであらう。我が國で子供を大切にしたり可愛がることは誠に結構である。歐米の汽車でもバスでも若し乗客が込むときは子供が立つてゐなくてはならぬといふのに對し、我國には大人が子供に座席を譲るのは誠に美風といはねばならぬ。しかしこれがために、我國では子供が誠に我儘 あるといふ惡風が幼少な時代から養成せられるのは誠に遺憾である。大人が疲れて席に腰掛けてゐるときに子供が我儘をいつて座席を要求したり、窓外を眺めるた

めに駄々をこねて大人に迷惑をかけても、親は當
前のやうに子供の歡心を買ふことを努めるといふ
が如きことは教育上甚だ面白くない。こんな無理
な我儘を子供に通させることは絶対にさげねばな
らぬ。尙ほ子供を汽車に乗せて夜中時々子供が座
席からねむりこけて落下するものがある。また痲
高い聲で泣く子供が少くない。誠に止むを得ない
ことであるが、他人に迷惑をかけぬとか他人の睡
眠をさまたげぬ工夫が必要である。兎に角幼児で
も乳兒でも汽車旅行に伴ふことは子供のためにな
らぬ。幼兒ならば一面見聞を広めるといふこと
もなるが、五時間以上も汽車に乗ることは幼兒の
身心には無理である。況んや夜行の汽車で一晝夜
も旅行させることなど以ての外である。只母親が
旅行せねばならぬときには止むを得ない場合もあ
るが、成るべく幼兒や乳兒の旅行をさげたいもの
である。

關釜連絡船での話。満三歳位の女兒がゐた。假りに
芳子さんと名づけておく。中々のおちやつびいで、
姉さんと一緒であるが、いろ／＼と姉さんの眞似
をしたり、いろ／＼とおしやべりをしてゐる。船
は釜山に着くに間もなくつたとき、姉さんは下
船の準備をなし芳さんをつれてデッキに出たが、
まだ二三十分も時間があるので、二等船室に引返
し靴をぬがずに廊下から仕切を越して腰を下した
のである。すると芳さんも眞似て船室の所に腰を
下すと足が宙に上がった。そこで腰を上げて立た
うとするが中々うまく行かぬ。姉さんは手傳つて
立たせると芳子さんはまた腰を下し、そして自分
で立たうとする。しかし矢張立てぬ。そこで姉さ
んが起してやると、また腰を下して自分で起させ
んとする。しかし矢張自分だけでは立てぬ。姉さ
んが助けて立たせるとまた腰を下す、所謂試行錯

誤であるが、やつては試みることに實に十數回。かくて屢々繰返すことによりて同一の動作を繰返して學習してゐるのである。傍觀せる大人より見れば誠に馬鹿くしくお話にならぬが當人の芳子さんは全く一生懸命である。屢々繰返しく動作して練習するのである。これは幼兒の學習に甚だ多い形式である。

四

北陸線から羽越線に乗つて青森に出る大阪仕立の汽車中で朝方目をさますと隣の座席に父親が一人の女兒（假りに敏子さんと名づけておく）を連れて乗つてゐる。多分金澤から乗つたものであらうが。この敏さん満四歳でもあらう。顔は丸くふく／＼しく肥つてゐるがどんなにねむいか、九時頃になつても中々めをさませぬ。二等車のよりかゝりによりかゝつて眠つてゐる様は誠に無邪氣である。しかし疊の上の安眠とは異り、汽車中のこ

とであるから安眠出来ぬわけ。十時頃になつて漸く目をさましたが、あまり食事もせず只キャラメルを貰つて食つてゐる。その中にはつきり目がさめたものか、活動し始めた。お父さんの友達が寢台車から來て臺灣などの話をしてゐる。敏子さんは獨りで遊んでゐる。汽車中の遊びであるから至極單純なものである。お父さんのストークスの中にはお人形もあり繪本もあるが敏子さんはあまりそれを喜ばない。一寸お父さんがストークスから出したがすぐまたしまひ込んだ。一はお土産にするものかも知れないが。敏子さんは出來上がつた玩具よりも座席の上でとびはねる方が面白いと見える。お人形などで靜かに遊ぶよりも全身を動かす大きな遊びがすきであるらしい。その筈で敏子さんははちきれ相な身體で元氣に充ち／＼てゐる。眠つてゐるときは靜かであるが目がさめると活氣旺盛であるから、暫くもぢつとしてゐるこ

とが出来ない。こんな子供が汽車旅行する位苦し
いことはあるまい。窓外の景色には何等の興味は
ひかず、別に地理だとか詩歌といふ高尚な思慮も
ない。眠るか食ふか、またとびはねるかより外に
時間をたてるすべがない。ところが汽車の中では
とびはねる場所がない。この汽車は幸い羽越線で
乗客が少いから二人分の座席を敏子さんが獨占し
て立つたり座したりいろ／＼にしてゐるが溢るゝ
活力の持つて行き場がない。その中に敏子さんは
寄掛をよぢのぼつてこの寄掛に馬乗りになつた。
寄掛によぢのぼるだけでも一大成功で得意である
が、二つの寄掛に馬乗りになつて得意にドウ／＼
といつてゐる。しかしそれも一分と経ぬ間に寄掛
りからすべり下りてゐる。また苦心して寄掛りに
よぢのぼつて馬乗りになつてゐる。丁度木馬に乗
つた形である。普通ならば「何です女がそんなお
てんばをして。いけません下りてチャントすわつ

てゐらつしやいと叱られる所でありませう。しか
し敏子さんのお父さんは平氣でお友達と話をして
ゐる。じつとしてゐることの出来ない敏子さんを
汽車に乗せてゐる父親ほどある。寄掛に馬乗りす
る位は大目で見てゐる。また満四歳位の女兒だか
ら女とも男とも區別つかぬ位である。女は女ら
しく男は男らしくなんて教訓するのが野暮な話。
敏子さんは上つては馬乗りをなし、またすべり下
りてまた上ぼるといふ動作を繰返すこと六回。大
分疲れたと見えてキャラメルを食つて休んでゐ
る。

暫くして敏子さんはワット大聲で泣出したので
車中の人々が皆驚く。「痛いよう」と泣き叫ぶの
で、お父さんは「泣くと尙ほ痛いよ」とおどした
り「私が悪かつた」とあやまつたりしてゐる。そ
の筈でお父さんも無聊のため敏子さんにからかつ
て敏子さんの腕にはまつてゐるグム紐をギューと

引張つて放したからたまらない。ゴムが縮んで敏子さんの腕の肉を強く打つたわけである。敏子さんの痛いのも無理がない。それで敏子さんが泣くと、親は勝手なもので叱つたりおどしたりしてゐる。何も子供にからかつたりする必要がないのであるが、自分の無聊なるが儘に、また子供を可愛がりすぎて子供を玩具にするやうなことが多い。そして子供が泣けば叱るのは大人の勝手である。注意すべきことである。

五

青森から青函連絡船で函館に渡つたのが夜の十時、直に札幌行の汽車に乗つて白河夜船、こくり船をこぎつゝ札幌に向つて走る。「お母さん富士山が見えるよ」と叫ぶ男児の聲に眼をこすり窓外を見ると成程富士山がすぐそこに見える。こゝは北海道だ、駿河の富士山が見える筈がない。「寝ぼけてはいけない、あれが富士山であるもの

か」と自分で自分を叱付け、出来るだけ活眼を開いて見ると矢張り富士山。ハテサテ不思議と四方を見廻せばこれは矢張り北海道である。この富士山は本當のものではない。あれが蝦夷富士とも松前富士ともいはれるものである。それにしても誠によく似たものである。乗客は誰彼となく珍らし想到この富士山を眺めてゐると向ふの座席にひよつこり昨日の敏子さんが立つてゐる。敏子さんも矢張お父様と札幌へ行くのだ。私には昨日のなじみがあるが、敏子さんは平氣な顔。尤も私と一言も言葉を交はさぬ敏子さんである。私は敏子さんの觀察で汽車の無聊を慰めてゐるから、敏子さんがまた乗つてゐるので何となく嬉しい。私の眼は北海道の風物に注がれてゐるが、また時々かの敏子さんに向ふのは自然。別に敏子さんに戀してゐる譯でもなく、敏子さんを愛してゐる筈でもない。敏子さんはまだ満四歳位の幼児である。汽車中で

男を拾つたとか、女を捕へたとかいふモーター振り發揮する位若い年齢ではない。況んや相手は幼児、しかも敏子さんを見付出した私は舊知の友に再會した心地で敏子さんに眼を注ぐのは自然である。

わが敏ちゃん今日は誠に元氣である。昨日の朝寝坊に引きかへ今日は大變に早起である。しかも元氣で盛に活動してゐる。北陸線や羽越線に比して北海道では氣温が低く涼しいからでもあらう。また今日はお母さんのところへ行くからでもあらう。すばらしい元氣である。二等の座席に立つてはねてゐる。その中、向ふの座席にとばんとしたが大變躊躇した。一度は下りて向ふの座席に上つたが、更に元の座席に歸りたくなつて今度は一大決心をしたと見え、向へとんで見事に成功した。サア一度成功すると今度はまたとびかへり、一つの座席から向ふの座席に、その座席から元の

座席にと、五回とんで一休みしたが、更にまたとんで合計十回ばかり。そこで疲れたと見えて止めたのである。これも幼児が學習の心理、反覆練習によつて上達する道理である。